

午前二時。街の喧騒から切り離された二十四時間ジムは、無機質な青白いLED照明に照らされ、静まり返っていた。

「……はぁ、……っ、くっ……っ」

俺の不格好な呼吸音だけが、誰もいないフロアに虚しく響く。

(……この時間でよかった。誰もいない)

自分を変えたくて、通い始めた。どうせ変わろうとするなら、誰にも知られない場所で、誰にも見られない時間がいい。不格好でも、情けなくても、ここには俺しかいないから。

それに、なにより身体を見られなくて済む。

トレーニングウェアを着ると、身体のラインがはっきりとわかる。人口の数%は存在しているとはいえ、カントボーイはまだまだ珍しい存在だ。だから、昼間に来てしまえばきっと人の視線を集めてしまう。

「これで、合ってるのか……？」

けれど、初心者の俺がネットで調べながら見よう見真似で続けてきたところで、数週間程度じゃ成果なんて出ない。焦りと、場違いな場所に来てしまったという後悔が、じわじわと胸を締め付ける。

滴る汗を拭いながら、次のマシンへ移動しようと、顔を上げた。

——その時だった。入り口のドアが、静かに開いた。

(……え？)

黒のトレーニングウェアを着た男が、フロアへ踏み込んでくる。広い肩幅。無駄のない筋肉。整っていて、落ち着いていて、こんな深夜の無人ジムには似つかわしくないほど、都会的な佇まいをしている。

そしてその顔が、俺の記憶の中のある顔と、ゆっくりと重なった。

(……恭眞(きょうま)くん……?)

向こうも、こっちを見た。

「音路(ねろ)? 久しぶり」

低く、落ち着いた声だった。数年ぶりに再会したとは思えないほど、静かで、普通だった。

「久しぶり……」

俺は言葉が出てこなくて、ただ固まった。本当に久しぶりすぎて、どういう顔をすればいいかわからない。

俺と恭眞は幼稚園から高校まで同じだった。いわゆる、幼馴染という間柄だ。だからそれなりに話すことはあったけれど、大学に入ってからは何年も連絡を取っていなかった相手だ。今さらどうやって声をかけるのが正解なんだろうか。

「こんなところで会えるとは思ってなかった。家は
この近くか？」

「あー、まあ……」

「そうか」

それだけ言って、彼は広いフロアに他にも空きがあるというのに、迷いなく俺の隣に腰を下ろした。カチャリ、とウェイトを調整する金属音が響く。

(なんで、隣に来るんだよ……)

動揺を押し隠して、俺はセットを再開した。隣から伝わってくる、男の静かな熱量。彼がセットをこなすたびに、規則正しく繰り返される呼気。横から素人目で見ても、美しいフォームだった。俺の呼吸はみるみる乱れていく。相変わらずの完璧人間ぶりに、嫌気が出そうだった。

そうだ。俺はこいつのペースに、昔からずっと飲まれてきたのだった。

「……フォーム、全部間違ってる」

不意に、恭真くんが言った。

「……っ、うるさい」

「怪我するぞ」

「平気」

短く返して、俺は視線を逸らした。こいつは昔からこうだ。俺が強がるとわかっていて、それでも正論だけを置いていく。

(……なんで来たんだ、こんな時間に。偶然にしたって、なんでこんなタイミングなんだ……)

せめてあと一ヶ月もあれば、マシンにだって慣れるはずだったのに。あんまり不恰好なところを見せたくないのに。

「……俺、次はあっちやるから」

俺は逃げるように立ち上がり、フロアの隅にあるスミスマシンへと移動した。

バーが鉄枠に固定された、初心者向けのトレーニングマシン。軌道が決まっている分、安全性は高い。少なくとも、フリーウェイトよりは一人でも扱いやすかった。

（大きな鉄枠に囲まれてるし、これなら俺のことも見えないだろ……。あいつの視線が、届かなくなる）

バーの高さを調整してから深呼吸し、バーを握った。

（すぐ帰るのは、なんだか恭眞くんのことを意識してますって言ってる感じで嫌だけど。でも、ちょっとやってからならいいや。……早く終わらせて、帰ろう）

いつもより少し重い負荷を設定した。恭眞くんに見られていると思うと、情けない姿なんか見せたく

なくて、無意識に強がる。我ながら馬鹿だと思う。

「……んっ、くっ……！！」

三回、四回。五回目を迎えようとした瞬間、肩にかかる重圧が、急に壁のように動かなくなった。

「あっ……！」

（上がらない……っ。やばい、潰れる……！！）

重力に押し潰されそうな恐怖が、全身を支配する。バーベルが少しずつ、俺の身体を床へと押し下げていく。

「……っ、助け……」

声にならない呻きを漏らした、その時だった。背後に、熱が密着した。

「だから危ないと言っているのに」

耳元で、静かな声がする。同時に俺の肩の上で震えていた鉄の棒に、大きな手が添えられた。恭眞くんの手だと、触れた瞬間にわかった。昔から、この手はでかかった。

彼がグイと力を込めると、絶望的な重さだったバーベルが嘘のように持ち上がり、カチャリ、と安全装置に固定された。

「……あ、り、がとう……」

「ああ」

けれど、彼は離れなかった。

バーを支えていた腕が、そのまま俺の脇の下へ滑り込んで、震える肩を包み込むように密着を深めてくる。スミスマシンの鉄棒と、恭眞くんの分厚い胸板。前後に逃げ場を塞がれて、俺は身動きが取れなくなった。

「……何？ 離してよ」

「まだ手が震えてる」